

会 報

(平成17年3月号)

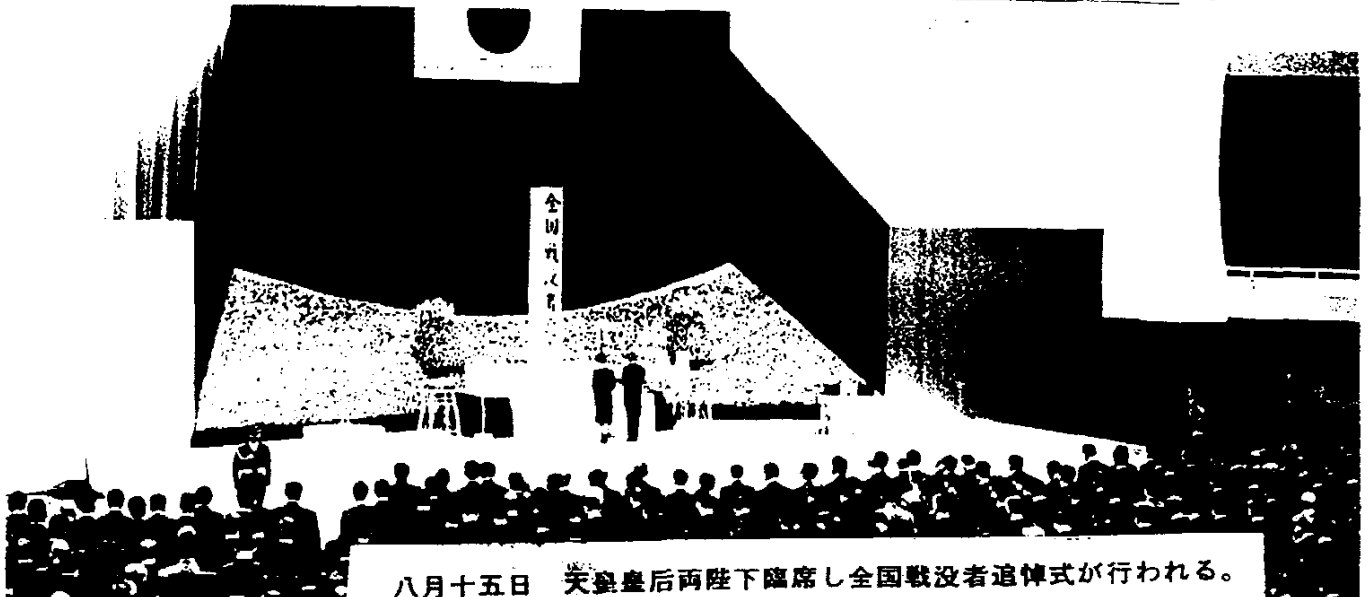
東部ニューギニア戦友会

157-0073 世田谷区砧6-32-5

TEL、FAX=03 3416 6504

編集発行

事務局



1 慰霊祭関係の案内は別紙

終戦六十周年を折念してニューギニア戦友会主催による
最終合同慰霊祭は平成17年4月5日斎行されます。

1 戦友会長ご挨拶

戦友会長 堀江正夫

はじめに

当面の問題に就いて

靖国問題の本質について

わが国の採るべき方策について

終りに

1 戦友会の歩み

前号まで記載報告したのですが多くの要望に
応えて大幅に加筆し再掲載しました。



堀江 正夫氏

ご挨拶

○ はじめに

終戦60周年という、大きな節目の平成17年を迎えました。

皆様とご一緒にまず以て皇室の弥栄を壽ぎ、ご英霊に敬虔の誠を捧げ、戦後鬼籍に入られた我友のご冥福と、病床にある諸兄のご本復をお祈りしたいと思います。

○ 当面の問題について

最初に戦友会に関わる幾つかの問題についてご報告申し上げます。

1. ご遺骨の収集について

昨年も厚生労働省による東部ニューギニア地区の遺骨収集が行われ、ポイキンとマリン街道地区から、計123柱のご遺骨をお迎えすることができました。

マリン街道地区は河部隊の棚橋幸二さんの調査に、ポイキン地区はご遺族の酒光幸子さんと加藤ひでさんの報告に基づく、3年連続の収骨でありました。

戦友会からは岩谷寿春さんにお願ひし、戦友会を代表してご参加頂きました。

2. 合同慰霊祭の実施について

隔年実施してきた陸海軍合同慰霊祭は、本年4月5日執り行います。

明後年以降も引き続いて実施したいものと、各部隊世話人や一部のご遺族といろいろ協議しましたが、戦友会は老齢化の限界に達しており、ご遺族もなかなか纏まりが難しく、残念ながら今回を最後とすることにいたしました。

つきましては、最後となる今年の慰霊祭には一人でも多くの戦友・ご遺族のご参列を頂きたいものと、皆様方のご協力を心からお願い申し上げます。

3. 永代神楽の実施について

合同慰霊祭の中止に伴い、全陸軍部隊（海軍は既に別途永代神楽実施を決定）として、靖国神社に永代神楽代を奉納し、毎年お神楽奉納当日に各部隊の戦友とご遺族の有志が随意参集し、ご一緒にお詣りすることに決定いたしました。

つきましては、お神楽の奉納およびお祭り当日のご参列について、関係各部隊、戦友、ご遺族の格別のご協力を切にお願いしてやみません。

○ 永代神楽祭は毎年 四月五日、14時から行われます。

4. 現地の慰霊巡拝について

昨年も戦友会主催の現地慰霊巡拝を計画しましたが、参加者が少なく残念ながら実施できませんでした。

本年は、終戦60年という大きな節目の年にあたります。私も90才になりますが、8月下旬～9月上旬頃、ぜひとも最後の慰霊巡拝に参りたいものと思っています。一人でも多くの戦友・ご遺族の皆様とご一緒できればと、心から念じております。

○ 靖国問題の本質について

次に、最近の靖国神社の総理参拝問題について、若干の所見を申し述べたいと思います。
最近の中国首脳の前次小泉首相の靖国神社参拝阻止の内政干渉は、全く目に余るものがあります。

中国は何故ここまで執拗かつ声高に干渉を続けるのでしょうか。

彼らはその大きな理由に、日本の侵略により長年にわたり大きな被害を受けた、その侵略の首謀者を祀った靖国神社に、日本国を代表する総理が参拝することは、党も政府も許さないし、中国の国民感情もこれを許さないことを挙げております。

総理の参拝中止を称える中国の国民感情についてまず考えてみましょう。

たしかに、経済の開放発展とともにある程度の国民意志の表明は可能となりましたし、党の締めつけも少しは緩やかになった面もないとは言えないでしょう。しかし、中国は依然として強力な共産独裁国家であり、その方針に副わない行動は寸毫も許さないのがその実態であります。また、この反日国民感情は長年にわたる党や政府の、徹底した反日愛国教育の結果であることは、世界がこれを認めるところであります。

したがって、民主主義国の国民世論とは全く違うということを知るべきであります。

実は、彼らが反対する本当の理由は全く別のところにあるのであります。

それは、彼らがその富国強兵政策の進展によって逐次自信を深め、まさに政治・経済・軍事の各面でアジアの盟主となることを国家目標とし、諸般の政策を進めていることにあるのであります。

すなわち、彼らの目的達成に最も邪魔になるのが米国と日本の存在であり、両国の強固な同盟関係であります。

そしてこれを突き崩すために狙いを最も狙いやすい日本につけて、硬軟両様の揺さぶりをかける、その焦点を総理の靖国神社参拝に向けたということなのであります。

それは、現に日本政府だけでなく国民の大部も中国に侵略し多大の迷惑を掛けたと思っ
て大きな負い目を感じている、また、いわゆるA級戦犯を処刑した東京裁判を政府自身容
認の立場にある、さらに総理の靖国神社参拝については、政党や有力な政治家の中にも相
当否定するものがある。だから靖国問題が最も攻めやすいし効果も挙がると考えているか
らに他ありません。

したがって、仮に靖国神社問題で百歩譲ったとしても、彼らの攻勢がこれで収まるとい
う保障は全くなく、新たな問題を把えて攻勢をかけ続けてくるのは、必至と考えねばなり
ません。

○ わが国の採るべき方策について

このように考えてきますと、日本が採るべき方策は自らはっきりしてまいります。

以下はこれについての私の愚見であり、提言であります。

1. 当面、中国の執拗な干渉に対しては断じてこれに屈することなく、総理は胸を張って春秋の例大祭と8月15日に靖国神社に参拝し、終戦60周年の大きな節目の本年、天皇陛下ご親拝の道を開くことにより、日本の断固たる姿勢を示すべきであります。

2. 次は、政府はサンフランシスコ条約の誤訳によって、東京裁判容認の立場にある非を正式に匡正宣明し、また、国会で満場一致、いわゆる戦犯なるものを認めない決議をしていることを、改めて天下に明らかにすることであり、

3. 史実に照らし、満州事変、支那事変、大東亜戦争ともに侵略戦争でなかったことを政府も政治家も国民も、正しく理解することであり、東京裁判史観の呪縛からの脱却であります。

① 満州事変は、日本が海外における既得権益擁護の武力行使は自衛戦争であるとの条件を付して、ハーグ条約に調印したその上に立った事変であったことを正しく理解主張すべきで、当時の満州において熾烈きわまりない反日行動によって如何に多くの日本人が殺害され、既得権益が侵害されていたか、これに対抗して遂に堪忍袋の緒を切って立ち上がったのが満州事変であることは明瞭であり、断じて侵略戦争ではありません。

② 支那事変の発端が、中国共産軍に対する国民党軍の矛先を日本軍に向けさせるための謀略であったことは、中国共産党劉少奇^劉主席自らが明らかにしているとおりであります。

局地解決、不拡大方針の日本に対し、これを上海に飛び火させ、さらに全国土に拡げたのは、全国土を利用し持久を策した蒋介石自身の戦略によるものであり、短期決戦による早期解決を目指した日本に対し、これを拒絶し長期戦に持ち込んだのは、強力な支援を行ってきた米国等が蒋介石にその道を封じたからであります。

総じて支那事変は、中国さらに米国に致された戦争であり、断じて日本が意図的に侵略を策して行った戦争ではありません。

③ 大東亜戦争が自衛の戦争であったことは、既に世界の識者や米国の当事者自身も認めるところであり、喋々贅言を要しないであらう。

○ おわりに

以上、随分と長いご挨拶になりましたが、最後に国のために尊い一命を捧げられたご英霊をお護りし、これを顕彰することは、政府と国民に課せられた当然の大きな責任である。これを疎かにすることは、国の安全と繁栄の放棄であり、存在を危うくするものである。私共はこのことに深く思いを致し、靖国神社を^{靖国神社}不動のものにするために、近く行われる憲法改正の中で政教分離の条項に必要な改正を行うことが、生き残った者の最後の勤めであることを強く自覚し行動すべきものと確信いたします。

皆様のご理解とご協力を切にお願いし、今後益々のご自愛ご健勝ご多幸をお祈り申し上げます。

(1月30日 記)



降伏調印のため 岬の式場に向かう安達軍司令官一行

戦友会の歩み

★要望に答えて前号の記事に加筆し再掲載しました。

18軍司令部 後藤友作

文中敬称略

昭和17年、南海支隊の一部と海軍部隊が協同して、東部ニューギニアのラバ及びサラエに上陸占領し、ナ地区に進出したのが、ニューギニア戦の始まりであった。海軍部隊による東端セ攻略失敗後、陸路ポートモズビー攻略の命を受けた南海支隊は、同年8月ナを発進し、オースタラ山系を越えて豪軍の抵抗を排除しながら、9月中旬にはポートモズビーまで40kmにせまるイリバワに到着したのであったが、糧弾の補給が続かなかったことと、ソロン方面の戦局悪化などのために作戦を変更せざるを得ず、発進の地ナまで撤退しなければならないことになった。

この撤退行動は米豪軍の猛追撃と、食糧の欠乏、病魔と連日のスコールなどで苦難を極め多くの戦没者を出した。

この作戦に参加した主な部隊は、四国編成の144聯隊、広島の41聯隊、独立工兵15聯隊を基幹にして編成された部隊で、総称南海支隊の将兵であった。

米豪軍の反攻作戦はマッカーサー大将を総帥とした反攻軍で、ニューギニアのナ地区には11月中旬進攻するに到ったのであった。ナ地区のわが陸海軍はこれを迎え各地において激戦を展開したのであったが、海空軍の支援により圧倒的に優勢な米豪軍の攻撃を受け各地区において玉砕するに及び、昭和18年1月20日には同地を撤退せざるを得なかった。南海支隊長、堀井少将、後任の小田少将、海軍陸戦隊司令、安田大佐（戦死後二階級特進）など多くの高級指揮官たちが戦死されていることでも激戦の状況が推測される。

わが軍はその後、17年11月 第18軍を新設（軍司令官 安達二十三中将）東部ニューギニアの要衝に兵力を増強し戦勢の挽回を計ったが、米豪軍は周到な大軍備と海空軍の支援の下に、要地を飛石的に奪取する作戦を取ってきた。これがため我が軍はナメ地区の撤退に始まり、ラエ、サモア、フィッシュハーブ、フィニステル山系の各地において死闘を繰り返したのであるが、遂に米豪軍に攻略されるところとなった。

昭和19年 7月、我が軍は残存兵力を結集して、アイタ 東方の トリニモル 川（日本名坂東川）西岸の米豪軍を攻撃した（アイタ作戦）のであったが米豪軍の逆襲激しく、損害続出するに及び作戦を中止せざるを得なかった。

その後は トリモリ、及びアルハンガ 南麓の地において、残存全軍が一丸となって死闘を繰り返し、玉砕寸前で終戦を迎えたのであった。

以上の東部ニューギニア戦におけるわが軍の損害は、該地に上陸し参戦した15万に及ぶ将兵の 93 名に及び、終戦により内地に生還した人員は 10,072 名と記録されている。

この間、戦斗による戦死者のほか、進攻 撤退作戦中、亦、輸送船団の壊滅による遭難戦死、標高 4300 名の峻険山岳の移動なども二回、未踏のジャングル踏破、ラム、セビック両大河周辺の大湿地渡渉転進など、加えて補給途絶のため糧食の欠乏、悪性熱帯病等による死没者などで遺体は文字どおり、水つく屍、草むす屍の状態そのまま、収集して持ち帰ることも許されず、戦場に残置するところとなった。

而しながら戦闘の合間には、各部隊において戦友の遺体の一部を火葬に付し、内地送還を準備したもの、野戦病院や部隊ごとに埋葬されたものもあった。

終戦後 マジ島終結中に戦没しものは、各々墓標を建て埋葬された（後日、収骨派遣された練習船大成丸により、全英霊を発掘し帰還せしめた）。

戦犯容疑者として 安達軍司令官以下 145名を ラバウルに残したまま、昭和21年初頭生存者は全員帰還したのである。

帰 還 船

第一次＝ 鹿島(20年12月) 第二次＝ 高栄丸(21年1月) 第三次＝ 鹿島(21年1月)
第四次＝ 酒匂(21年1月) 第五次＝ 氷川丸(21年1月) 第六次＝ 鳳翔(21年1月)

（第五次帰還船。氷川丸は改装され観光船として横浜港埠頭に係留されている）

東部ニューギニア作戦に参加した全部隊（厚生省、防衛庁戦史室資料より）

部隊名	戦略通称名	参戦人員
第 18 軍司令部と直轄部隊	猛部隊 102 部隊	37,801名
第 20 師団	朝部隊 15 部隊	23,385名
第 41 師団	河部隊 14 部隊	19,960名
第 51 師団	基部隊 16 部隊	28,888名
船舶関係部隊（船舶工兵、揚陸隊）	暁部隊 15 部隊	10,606名

船舶関係部隊（船舶工兵、揚陸隊）陸部隊	15 部隊	10,606名
海軍部隊（陸戦隊、建設隊含む）	32 部隊	約 8,000名
陸軍航空部隊（飛行場隊含む）	34 部隊	14,108名
ブナ方面部隊（主として南海支隊）	26 部隊	14,898名

★1－終戦後生存者として軍が掌握し内地に帰還した人員 10,072名

★2－軍主力復員後、逐次帰還した人員。

A＝ネーランド方面 142名。 B＝抑留者 563名 C＝戦犯及び証人 126名

★3－補充要員として海上輸送途中に海没した将兵、病還、転属等は含まない。

★ 高砂義勇兵（ネ、政）。 徴用沿岸輸送用漁船団（500隻×2）。 伊予義勇軍。
台湾奉公団（政） 徴用民間団体（パラオ版）等は含まない。

昭和30年4月

厚生省においては、運輸省所属の練習船 大成丸で、南東太平洋 旧戦域である
東部 ニューギニア、現パプア、ニューギニア本土北岸一帯を第一回 海外戦没者
遺骨収集事業として収骨作業を実施された。

実施期間 昭和30年 2月 ～ 4月 65日間。
収骨地域 ブナ、サラモア、ラエ、フィンシュハーヘン、マダン、
ウエワク、ムシュ島、ボイキン、アイタベ、
収骨協力員 大成丸乗組 練習生百五十余名 (以下記職氏名、敬称略)
現地案内員 松崎栄次(18軍司令部 主姓) 今村秀(41軍 姓) 小畑耕一(20軍 大尉)
収集遺骨数 5,889柱

収集団員、協力隊員は停泊中の船舶内に宿営し収集に動めた。

★フィンシュハーヘン、ウエワク、アイタベの地に吉田茂首相揮毫の慰霊碑を建立した。

★アイタベの奥地で10年間、終戦を知らずに生き続けていた 島田覚夫氏 以下4名の
戦友が発見され、戦後十年振りでこの船で生還した。

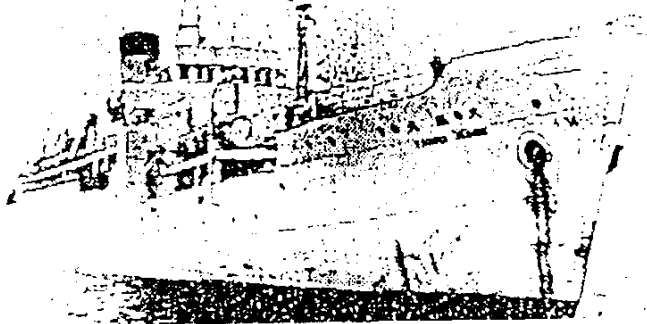
在京各部隊の生還戦友有志が出迎えした。

31年6月

オーストラリア 戦闘39大隊戦友会17名が来日、在ニューギニア戦の 生還戦友達と交流したい
という希望申込に答えて、吉原参謀長始めとして旧軍司令部関係者を主に17名が
三井別館（当時逓信省代用であった）に於いて歓迎懇談会を催した。



749A 奥地で 10 年間 終戦を知らずに
生きていた 4 名の日本兵が戦後
10 年振りでこの船で帰国した(読売新聞より複製)



41年11月

51師団 基部隊会主催により、在ニューギニア陸軍部隊生存者達が靖国神社において合同慰霊祭を執り行い、在京各部隊有志多数参加し慰霊に務めた。

★戦友会報 初刊発行す。編集発行者は 黒井得憲氏(元第1師団)であった。

43年11月

在ニューギニア戦に参戦した 陸 海 空 陸 部隊所属の生存戦友が大合同して慰霊祭を催し、東部ニューギニア戦友会が結成された。

会長 杉山 茂(元第1師団) 事務局長 柚原 久(元第1師団) 補助 後藤友作
昭和44年中に旧戦場ニューギニア地域の、遺骨収集事業の実施を決定した。

従来、東部ニューギニア作戦参加の陸、海、空軍生存者は、各部隊ごとに、或いは合同して随時慰霊祭を行ってきっていたが、43年11月10日、靖国神社における東部ニューギニア戦友会の合同慰霊祭時を期して陸、海、空合同の戦友会が組織されその第一回の重要事業として、遺骨収集事業を取り上げたのであった。

なお、この遺骨収集事業を取り上げ得たのは、当時の厚生省援護局による 第二次東部ニューギニア遺骨収集を、44年度に実施することが概定していたので、これに密接に

協力して現地主要地域に、戦友会で組織する遺骨収集団を派遣し、残留遺骨の収集を実行するというもので、方針決定に伴い遺骨収集団派遣計画案を策定し行動した。

★ 現地における収集時期を44年秋10月派遣期間＝1ヶ月。派遣人員＝50名とした。

★ 派遣に伴う旅費、滞在費、遺骨収集経費等一切の経費、派遣準備に必要な諸経費、収集帰国後の事後処理費等は、すべて戦友会員の寄付によるほか広く各地方行政機関、協力団体、有志等と呼び掛けて絶大な協力を得ることが出来た。

★ 派遣団員の現地行動用、作業衣袴、半長靴、飯盒水筒、蚊帳毛布、作業用器具類円匙に至まで、陸上自衛隊の好意により借用することが出来た。

また、当時は独立前でもあってスーパー商店など皆無（ウエワクでは華僑の雑貨の小店が2～3軒見えた程度）であったために、食糧の半分を内地より船積携行半分は現地調達で賄うよう準備した。

★ 宿泊経費は、10月7日～28日迄の間、各人一泊3.5^円の範囲内で民泊、教会などを按配利用し、現地で収骨作業の行動中は、毎日自炊であった。

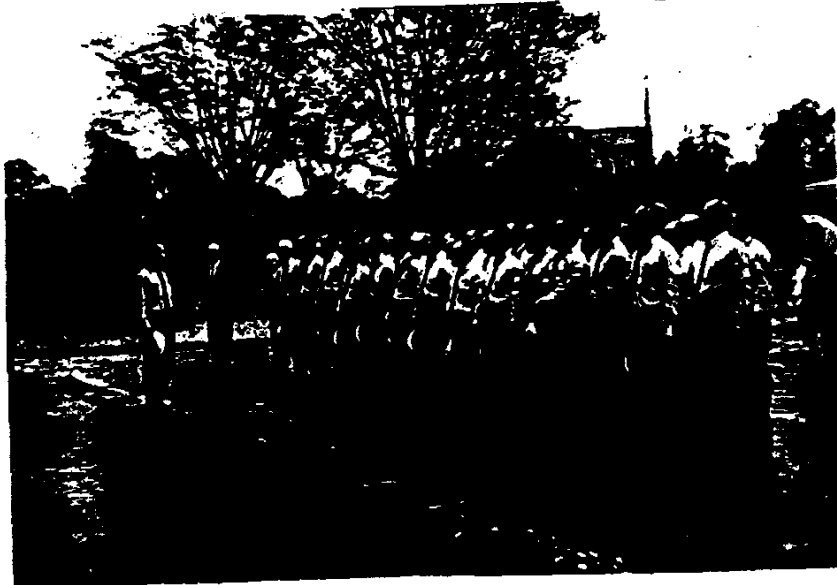
★ 道路事情も未整備で、車両の利用はモビ、ラエ、マダ、ウエワ、という拠点の市内だけで旧戦域の収骨地域に行く移動は、昔ながらの徒歩以外に無いので難渋した。

昭和44年度

遺骨収集事業

実施期間	昭和44年10月 4日～11月 2日まで 30日					
収集遺骨数	7、566柱					
派遣団員（戦友会員）	50名 + 5					
収骨地域と団員（敬称略）	①＝班長 ②＝副班長					
総指揮	団長	田中 兼五郎	猛(18軍司令部)			
ギルワ、	①中橋 広吉	南(南支隊司令部)	②松舎 一之	南(歩、41聯隊)		
ナ 班	今西 貞茂	南(歩、144聯隊)	白川 清広	曉(船工、五聯隊)		
			吉村 幸雄	(高知 新聞)		
マダソ	①古川 治	朝(歩、78聯隊)	楢原 義夫	猛(船工、37聯隊)		
班	原 繁太郎	猛(123兵站病院)	巴 辰夫	猛23兵病(医)		
ラエ、	①中村 嶺八	基(歩、115聯隊)	②半田 隆盛	基(歩、66聯隊)		
ガラモ7 班	②大竹 謙次	基(歩、102聯隊)	古宇田義次	基(歩、102聯隊)		
	毒島 薫	基(基、2野病)	和久 和	基(歩、66聯隊)		
永井 鶴	基(歩115聯隊 通)	斉藤 平	(支隊病院)	大島 隆三	(熊本病院)	
ワインシュ、	①梶塚喜久雄	河(歩、238聯隊)	②是永 清	基(51師 司)		
ギリ 班	田島 正男	河(歩、238聯隊)	長友 久義	朝(野砲26聯隊)		
	福井 正隆	猛(18軍 司)	浦辺 弘	基(基、2野病)		
	矢野 金吾	基(野砲14聯隊)				
	桜井 三男	(上毛新聞)	星野和夫	(カンタス航空)		

ハンサ 班	①三田寺午之助 猛(44兵地隊)	中澤 豊喜 基(歩、102聯隊)
	細軍 仙祐 基(野砲14聯隊)	
ウエワ 班	①小畑 市郎 空 (2重砲隊)	②篠田 増雄 基(歩、66聯隊)
	細野千代治 基(歩、115聯隊)	平川 清一 基(工兵51聯隊)
	増淵 喜市 基(砲重51聯隊)	福田 稔 (下野砲隊)
山南 班	①佐藤 三郎 河(歩、239聯隊)	②温田 市助 猛(陸軍76中)
	小林英二郎 河(歩、239聯隊)	白田 正康 基(基、衛生隊)
ネイソ 班	①平井 和雄 朝(20師団 司)	②斉藤 孝也 海 (27特機)
	土谷 歳男 猛(18軍司令部)	後藤 友作 猛 (18軍 司)
ヤマ 班	①藤井 玉一 河(41歩兵団)	大塚 邦男 河(歩、238聯隊)
	富岡伊三郎 猛(90兵地隊)	渡辺 亮一 猛 (砲重2中)
坂東川班	①賀来 敬次 河(歩、238聯隊)	柴田 義信 河(工兵41聯隊)
	皆藤 正春 河(歩、237聯隊)	石原治太郎 河(歩、238聯隊)
	板橋 長吉 基(基、1野砲)	高久 博夫 河(歩、239聯隊)
指揮班	入沢 清 猛(高射砲63)	後藤 友作 猛(18軍 司) 兼任
	田中兼五郎 猛(18軍司令部)	



昭和44年収骨団、結団式

昭和45年9月 リタント ウエワク。

ニコニコ戦 終戦記念塔をウエワ岬に建立した、その除幕式を催すので、戦争関係国の戦友、代表だけでも出席されたいという ウエワ 州知事ヒックス氏からの出席要請があったので、杉山戦友会長ほか数名が参加した。

昭和46年4月

44年度の収骨事業時に、現地サラモア半島に残置されていた 我軍歴戦の高射砲
現地の州知事より貰い受けてあったものが、リー・簗子氏の絶大な協力により送達
された。

田中兼五郎氏 (18年、2代目) の尽力で自衛隊工廠で補修復元し、靖国神社
遺品館に献納 除幕式を行った。

昭和46年10月

10月10日より11月 7日迄の間、靖国神社遺品館に於て東部ユ-7、英霊特別遺品展
を開催して大好評を拍した。

昭和48年度

遺骨収集事業

実施期間

昭和48年 9月17日 ~ 10月19日。

収集ご遺骨数

1、631柱

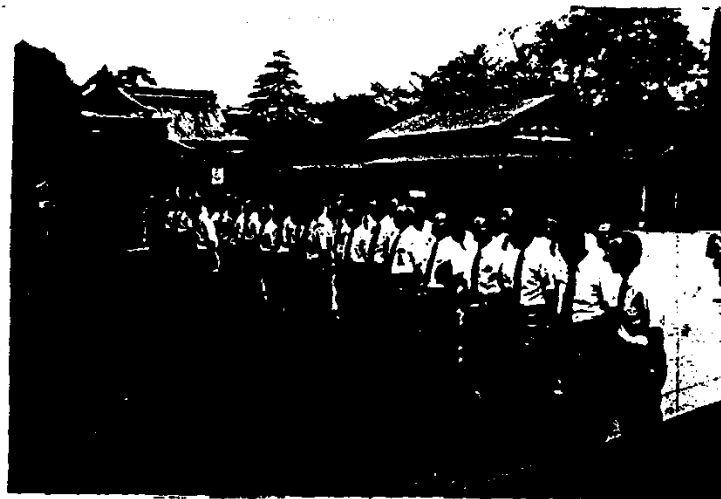
派遣団員 (戦友会員のみのみ)

40名。

(敬称略)	戦友会団員	堀江 正夫	猛(18年)	
1班 = 17。	岡村 千年	南(144年)	鶴飼 義信	曉(15年)
17。	津野勉次郎	基(51年 2)	辻本 喜次	南(15年)
17 地区。	孫田 長治	海軍 (82年)		
2班 = サラケット。	岡本 隆久	基(51年 10年)	篠田 増雄	基(16年)
17ピット。	亀田 英二	基(51年 10年)	佐藤秋三郎	河(16年)
地区。	伊達 繁	海軍 (15年)	和田 喜一	海軍 (82年)
3班 = 17。	福井 正隆	朝(17年 26年)	水町 輝	朝(17年)
17。	来見 良雄	朝(17年)	岩永 久男	朝(17年)
地区	矢野 金吾	基(17年 14年)	村山 満夫	猛(27 17年)
4班 = 17。	斉藤 順	朝(17年)	坂本 逸郎	朝(20年 17年)
17。	鈴木 良雄	猛(17年)		
5班 = 17。	大竹 謙次	基(17年 102年)	天野善三郎	空 (63年)
17 地区。	松永 正治	空 (68年)	川野亀治郎	空 (68年)
	小畑 市郎	空 (12年)		
6班 =	生井 徳一	猛(44 17年)	下田 公安	猛(17年)
17 南地区	吉田 哲夫	猛(44 17年)	柿山 健	猛(17年)
	桑原 壽	猛(117 17年)		
7班 = 17。	後藤 友作	猛(17年 17年)	須貝 龍二	猛(17年)
17。	小野沢政夫	朝(20年 17年)	高野 修作	海 (17年)
8班 = 17。	中村 福一	河(17年 237年)	平田 弘	河 (17年)
17。	高久 博夫	河(17年 239年)	竹節 梅蔵	河 (17年)
17 地区	横室 圭治	河(17年 41年)		

★地域開発、道路網整備などの進捗状況は、44年度の遺骨収集時と同様、大差ない状態であった。例えば、移動中^{（1）}に会えば道中の小流れも氾濫して立往生となる。^{（2）}は不通、車両は7-7まで、以西は原住民の通る^{（3）}をテクるのである。民宿、自炊、これも前回同様（^{（4）}）であった。限られた期日内で一体でも多く収集するために、^{（5）}来襲時が休息時で、次の収集地に移動する日は休日に振替え、現地の収骨作業期間中は全員休日返上であった。

★堀江団長一行が日程強行、^{（6）}渡河中に^{（7）}の危機にあい、案内原地民の救助で事無きを得たのも、この時であった。（^{（8）}）。



昭和48年収骨団 結団式

昭和49年度 遺骨収集事業

臺北(^{（1）})方面収骨団。別班としてホーランジャ地域。

実施期間 昭和49年10月～11月

収集遺骨数 (ホーランジャ地区) 540柱

18軍関係部隊 派遣戦友団員 3名

花輪 久夫 空(22^{（2）})、太田 勝三 海軍^{（3）}。五賀 悟義 空(208^{（4）})

★ 団長 柏井秋久(大臣官房参事官)以下65名(うち^{（5）}3名)。

★ 収骨総数 3,680柱(^{（6）}540柱であつた)

昭和52年3月

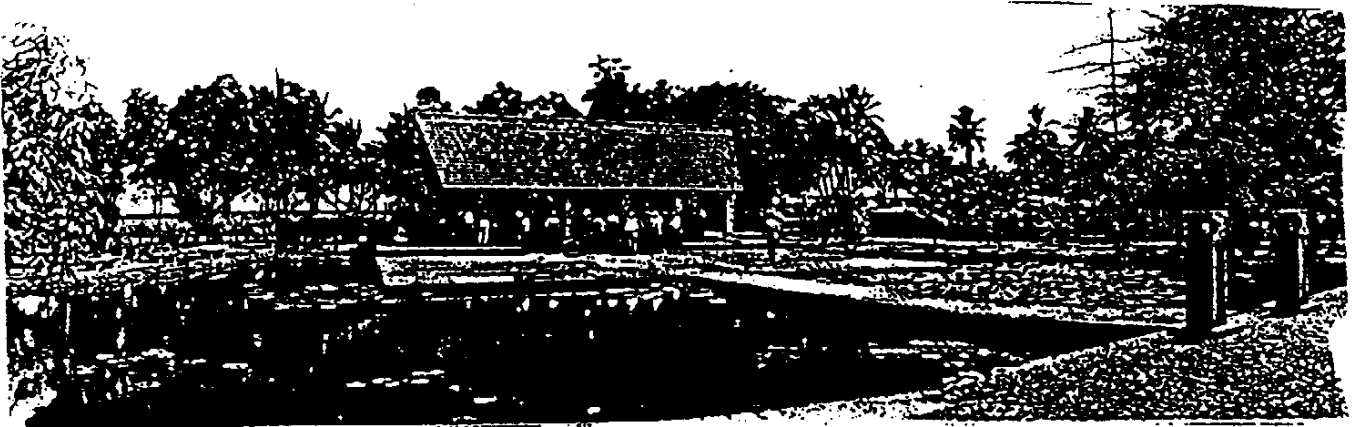
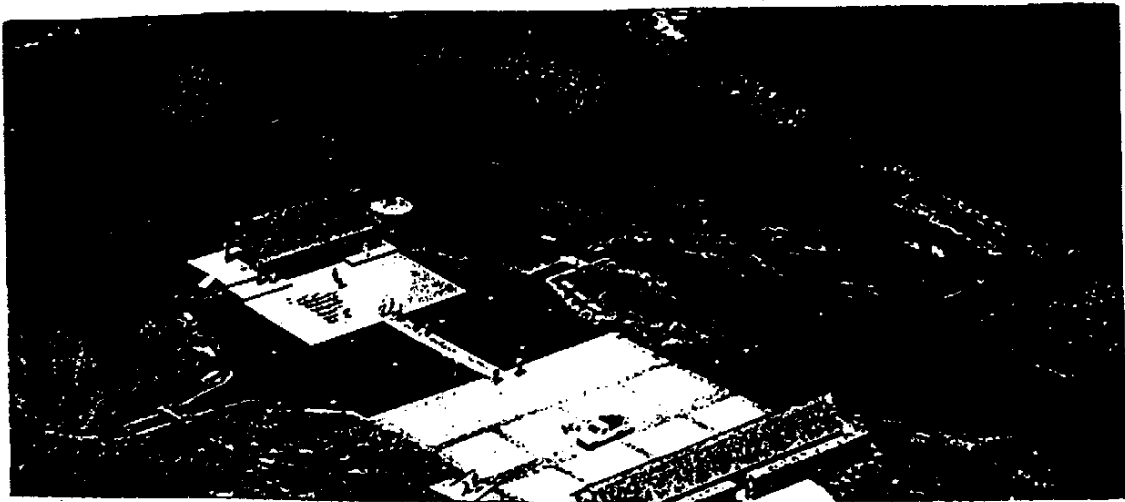
厚生省主催による^{（1）}地域の慰霊巡拝遺族団の依頼により、戦跡の説明と案内のため戦友会員4名を派遣、支援して歓迎された。

昭和56年2月

厚生省主催による^{（2）}地域、慰霊巡拝遺族団の戦跡案内依頼により戦友3名派遣支援して歓迎された。2回目である。

9月 ウエワク慰霊公園建立

ニューギニア全戦域の戦没者慰霊のため、厚生省が企画建設中の慰霊墓苑に対して戦友会では（募金による）拠出金(2000万円)を支援しあったところ、完成し除幕式には政府高官一行共々 田中兼五郎団長ほか戦友多数が参列した。



1977、ニューギニア、ウエワの慰霊墓苑 (平成 3年)

昭和56年9月 遺骨収集事業

収集事業実施地域 プナ。ギルワ。ラエ。地区。

実施期間 昭和56年 8月～ 9月

収集遺骨数 107柱

派遣戦友団員 10名

岡野 宗五郎	基(多 102聯隊)	吉成 真一郎	基(多 102聯隊)
前垣 寿三	南(多 41聯隊)	野上 実	南(多 41聯隊)
石田 一二三	南(多 41聯隊)	児玉 篤	南(多 41聯隊)
高木 実美	南(多 41聯隊)	川本 秀雄	南(多 41聯隊)
西本 秋穂	南(多 41聯隊)	師岡 寛	南(多 41聯隊)

★厚生省職員 小竹団長以下25名 ★他にソロモン諸島の調査団22名別班で同行した。

昭和57年2月 杉山茂戦友会長が逝去された。

戦友会では、ほかの数団体と協同して青山斎場に於て告別式を執り行なう。

各部隊会より代表と共に多くの戦友が参列された。

★次代戦友会長を 田中兼五郎氏に懇請し了承を得た。

昭和58年9月 マダン慰霊碑

マダンヤボタム (戦中123兵隊戦跡) の老朽化した慰霊木碑を、現地企業ジャント社の協力を得て修復再建した。

昭和60年度 遺骨収集事業

収集事業実施地域 ウエツク河川、セビック河川、山南-モトウナン、ビリンガ、マブリック西方。

海岸地区、ソナム、マルジツ、マリソ西方全地、クリス、タラワイ両島調査。

実施期間 昭和60年 9月～10月

派遣人員 小竹団長以下 36名 (うち戦友会員15名) 、

収集ご遺骨数 1、287柱

戦友派遣団員

田中 兼五郎	猛(18軍司令部)	富岡 伊三郎	猛(90兵隊病院)
千賀 照二	暁(船工9部隊)	森 正樹	猛(軍医局)
浅野 一夫	河(山砲41部隊)	仲村 進	空(6兵隊病院)
植松 保雄	朝(歩78部隊)	直井 源助	猛(44兵隊病院)
小林 久光	猛(歩兵隊)	信沢 益次	基(51歩兵連隊)
佐藤 松次郎	空(47大隊)	平川 義夫	空(63部隊)

榎橋 勲 空(21大隊) 本田 勝見 空(68部隊) 高取 惣次 海(歩兵連隊)

昭和61年1月 靖国神社

本殿解体修復事業実施中、舊警家根銅版瓦記名入り500枚分(100万円)献納した。

63年1月

靖国神社へ 本殿修復協賛金として(20万円)奉納す。

千鳥ガ淵戦没者墓苑へ 永代供養料として(10万円)寄進す。

昭和63年度 遺骨収集事業

実施地域 サラフケット地域 (ソモン収骨団、別班として)。

実施期間 昭和63年10月

派遣人員 厚生省 石田班長以下 5名 (うち戦友 2名)

収集ご遺骨数 66柱

坂口 悟 郎 基(歩102部隊) 宇佐美 晃 基(51歩兵連隊)

平成元年度

遺骨収集事業

実施地域 サラケット、ビソ、ウエワ、イミンダツ、ベリンガ、ソナム、バグ、ワリス、タラワイ 南島
収集期間 平成元年 7月 8日～ 8月 3日
派遣人員 厚生省鈴木団長以下 28名、(うち戦友6名)。
収集ご遺骨数 158柱
戦友派遣団員 後藤 友作 猛(18軍司令部) 犬塚 剛士 猛(第50大隊)
会川 利一 猛(第36隊) 宇佐美 晃 基(第1師団 通説)
森脇 清治 基(51師 102隊) 園田 定 朝(第79隊)

平成2年4月 田中兼五郎氏(二代目戦友会長)逝去された。

戦友会では他団体と協力して、各部隊会代表、戦友、政官財界 自衛隊幹部、多数参集して青山斎場で盛大な告別式を行った。

後任戦友会長を堀江正夫氏(元参院議員、現日本郷友連盟会長 戦友)に懇請し了承を得、就任して頂いた。

2月 今年度で13回目の現地遺骨収集事業を実施される予定であったが、該当地域の世情悪化のため収骨団派遣は中止になり、預託してある遺骨の引取りとウエワ慰霊公園補修調査を兼ねて、厚生省の職員だけの 収骨団が2月28日出発し、75柱のご遺骨を率持して2月10日 帰国した。

5月 戦友会とは格別に深い繋りがあった、朝鮮日本バブ、ニューギニア友好協会は、独立後の バブ、ニューギニア国との友好親善に、多大の功績を残して5月31日 解散した。

6月 お馴染のニューギニア航空が経営難とのことで、関空=モリス= 直通の航路を撤退し 6月30日 日本支社を一時 閉鎖した。

7月 7月19日 ニューギニア、スナ、地区(アイババ前70キロ)が、極地地震に連動した大津波の来襲による甚大な被害を報じた。

戦友会では前回に準じて会の予備資金より、被害見舞義援金として¥500,000 - をニューギニア大使を通じてニューギニア政府へ寄贈した。(丁寧な感謝の状送達あり保管)。

7月 遺骨収集事業 厚生省事業 派遣団員総員17名

戦友会団員4名、戦友会責任者は、会川利一氏、(第36) サラケット、ギモンデラ、他4地区、 遺骨収集総数 72柱

10月 遺骨収集事業、厚生省主導で実施された、派遣人員19名

戦友団員10名 戦友会責任者は、福家隆氏、(79 i)

別 転進路ほか3地区、 遺骨収集総数 125柱

平成4年6月 ニューギニア、ビック 地区の水害見舞い義援金として
金十万円也をニューギニア大使館を通じてニューギニア政府に贈呈した。

9月 遺骨収集事業 厚生省主導 派遣団員総員 16名
戦友会団員5名 戦友会責任者は、岡本隆久氏、(51D)
収骨地域は、サラワット、別 転進路、コダ 地区、
遺骨収集総数 89柱

平成5年4月 合同慰霊祭、東部ニューギニア戦域参戦全部隊会戦友と関係の遺族たち、
八百余名が参集し靖国神社で慰霊祭を執行した。

★＝ (四年目毎に執行されていた合同慰霊祭が今年より隔年ごと、
二年目ごとに執り行なうことになった)。

平成6年3月 靖国神社神門修復協力金として、金十万円也を寄進した。

10月 バブ、ニューギニアの災害見舞金として、(戦友会より約42万円相当) 金五十二万円也を
ニューギニア大使館を通じてニューギニア政府へ贈呈した。

平成 7年10月 政府が実施する戦没者遺骨収集事業に対し多年に亘り積極的に参加
協力し多大の成果を上げることができました、その協力に謝意を表す。
とのことでニューギニア戦友会に対して、厚生大臣より感謝状を授与された。

10月 遺骨収集事業、厚生省主導で実施された、派遣総員26名
戦友会団員7名、戦友会責任者は、棚橋幸二氏(41D)。
収集地域バブ、ウエツ以西、山南地区、遺骨収集総数132柱

平成11年 1月 ニューギニアの山間部で旱魃による飢饉状況が報じられニューギニア大使館からも
救援依頼があったので部隊会代表の了承を得まして、戦友会の運用資金内
より \$3,000 (邦貨換算¥392,700-)義援金としてニューギニア大使を介してニューギニア
政府へ贈呈した。(丁寧な礼状が届き保存)

平成10年度 遺骨収集事業
収集期間 平成10年 2月 厚生省職員、外 引取り受領のみ、
収集ご遺骨数 75柱。
戦友会員は参加せず。

平成12年度

遺骨収集事業

収集地域 新7、571 地区。モロ(100坪)。新7、 9171 地区。
収集期間 平成12年10月31日 ~ 11月17日
派遣人員 厚生省 神山団長以下 17名 (うち戦友 5名)
収集ご遺骨数 89柱

戦友派遣団員 今西 貞茂 南(多, 144縣) 橋橋 幸二 河(多, 239縣)
山崎 幸温 南(多, 144縣) 岩谷 寿春 空(新 24縣)
宇佐美 晃 基(51期 福)。

平成12年度

遺骨収集事業

収集地域 利川、兵站病院跡地周辺
収集期間 平成13年 1月21日 ~ 2月 5日
派遣人員 厚生労働省 神山団長以下 9名 (うち戦友 2名)
収集ご遺骨数 80柱。
戦友派遣団員 梅 忠重 海(証 証) 國田 定 朝(多, 79縣)

平成13年度

遺骨収集事業

収集期間 平成14年 1月 5日 ~ 1月17日の間 ポボンデッタ地区、
派遣人員 厚生労働省職員以下6名、引取任務。
収集ご遺骨数 12柱
戦友会員は参加せず。

平成15年度

遺骨収集事業

収集期間 平成15年10月21日 ~ 11月 7日の間。ポイキン地区。
派遣人員 厚生労働省小澤団長以下14名 (戦友 1名)。
収集ご遺骨数 123柱
戦友派遣団員 橋橋 幸二 河(多, 239縣)

平成16年度

遺骨収集事業

収集期間 平成16年 9月28日~10月12日の間 ポン ポイキン グッドイフ地区
派遣人員 9名うち戦友派遣団員 岩谷 寿春 (航空24縣地上)
収集ご遺骨数 123柱(前15年度遺骨と同量と報告された)。

ニューギニア戦跡案内

元第18軍司令部・猛7910部隊
後 藤 友 作 ことりやん

この「ニューギニア戦跡案内」に関するお問い合わせは
ニューギニア航空日本支社 広報担当 info@air-niugini.co.jp / TEL 03-5215-3551
までお寄せ下さい。

この文書の全部または一部を複写・複製・転載または光記録媒体への入力等を禁じます。
これらの許諾については、上記問い合わせ先までご連絡ください。
Copyright © 2003 Tetsuo Goto. All rights reserved.

感謝状

東部ニユーギテ戦友会殿

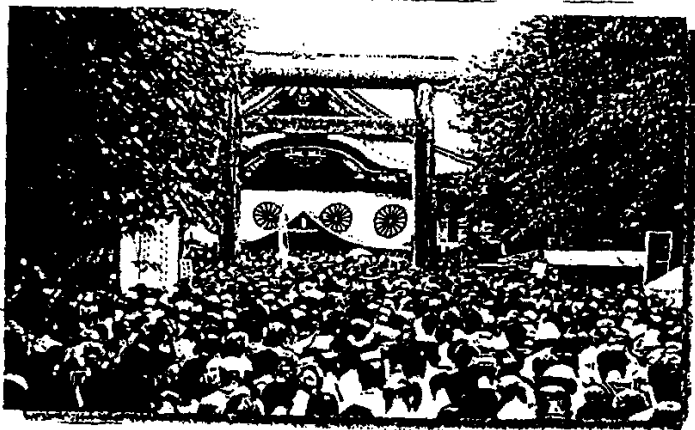
貴会は政府が実施する戦没者遺骨収集事業に対し多年にわたり積極的に参加協力されよって本事業は多大の成果をあげる事ができました
その御協力に対しここに深甚なる謝意を表します

平成七年十月三十一日

厚生大臣 森井忠良



収集ご遺骨 厚労省へ引渡式(千島が遺骨没者墓前で)

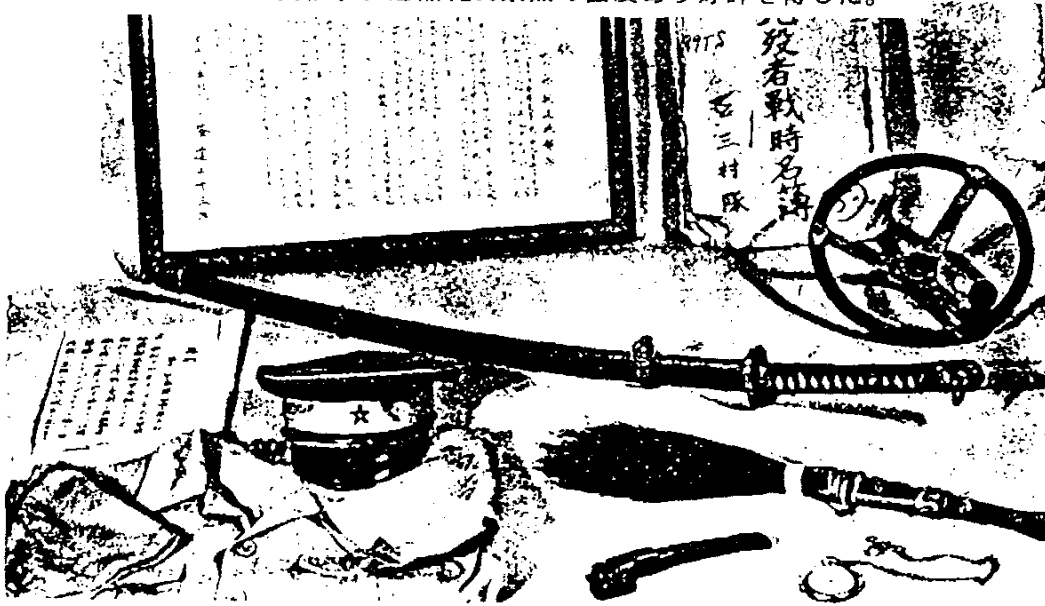


例年 8月15日の靖国神社



奉納 1917 半島歴戦の高角砲

昭和46年10月、靖国神社遺品館で ニュース7 遺品展を
1ヶ月に亘り開催す、遺品1200余点の出展あり好評を博した。



靖国の英霊は戸惑っている

元十八軍通信聯隊 岡崎弘之

今年一月十四日、小泉首相が靖国神社に参拝した事について、私が購読している
M紙は翌日の社説でこのように論評していた。

『思慮に欠ける行動である。過去の参拝の際に生じた混乱と外交上のマイナスを三たび起しかねない。中韓は戦没者の慰霊には反対していない。極東軍事裁判でA級戦犯となった人々が合祀されているからで、その靖国神社に参拝するのは、日本国首相の歴史認識にかかわると受け止められるからだ。それには政教分離の新たな追悼施設を早急に具体化させることだ』と。

また次頁の紙面では、各種団体の抗議声明などを載ていたが、その中の一つ。ある宗教団体は『靖国神社は、国家の戦争責任を回避する機能を果たす政治的意図で創設させた特異な宗教施設である』と。果してそうであろうか？。

靖国神社は、明治維新以後に国のため命を捧げた人々を、遠い昔からの日本国伝統にのっとなって、それらの人達を命（みこと）として崇て来た施設であって戦争責任を回避するためのものではない。

日本は、さきの大戦において敗北し、戦勝国による一方的な軍事裁判により戦争を指導したとされるA級戦犯者が処刑された。そのA級戦犯を靖国神社に合祀した事が特定外国により、また国内においても、戦後制定された日本国憲法の政教分離条項によって、首相の靖国参拝はその都度繰り返して抗議されてきた。

その抗議国中国は儒教の国であるが、靖国のような「忠霊廟」的施設はない、が、アヘン戦争以来の戦没者を追悼する人民英雄記念碑があって、中国を訪問した橋本、村山、の日本国首相はその碑に献花の礼を捧げている。

中国は毛沢東時代、自国民八千万人？が迫害されて亡くなったと言われているから忠霊廟建設は、やりたくても出来ないであろうが……。

ここで若し靖国神社からA級戦犯霊を除くとした場合、中韓の要人は訪日に際して靖国に詣でてくれるであろうか？、も疑問である。

靖国の近くには千島ガ淵戦没者墓苑がある。外地旧戦域より遺骨収集などで収骨されて帰還せしめたが、戦没者の氏名や関係遺族が不明の無名戦士を祭る施設である。靖国参拝を否とされる外国要人に、外交儀礼上弔問して頂くとなれば千島ガ淵墓苑でいいのではないか。政教分離の施設を新たに造る必要は無いと思う。

靖国神社は教義施設ではないのである。とにもかく、それが神社であれ仏閣であれ国のため殉じた人々を祭る奥津城に、その国の首相が詣でる事まかりならぬ、とはどう考えても理不尽な抗議と思える。

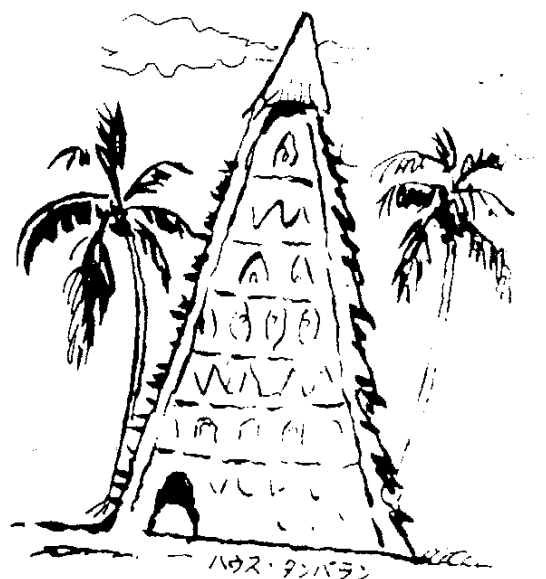
小泉首相が公約の“八月十五日かならず靖国参拝”から中韓の抗議をなるべく避けようとして他の日を選んだ心情は良く分かる気がするが、抗議国は八月十五日だろうが他の日であろうが、日本国首相の靖国神社参拝そのものに否なのである。

そこで、小泉首相に一国民、一ニューギニア生還者として願いたい事は、明治初年以來の靖国神社の来歴を披歴し、日本国首相として靖国参拝は欠かす事が出来ないものであるスピリッツをしたための書翰を抗議国に表明して頂きたいと思う。

歴史認識が相違するので納得は得られないであろうが、主張すべきは主張しておくべきであろう。

おわりに、 私たち第十八軍通信隊
電信第三聯隊が、昭和十七年十二月
ニューブリテン島ラバウルに上陸してからの
ある日、内地からの日本週報の中に五線譜のつ
いた短歌調の歌詞が載っていた、お玉杓子を解する
戦友に、そのメロデーを尋ねると彼は即座に歌って
くれた。

靖国の宮にみたまは鎮まるも
おり折かえれ母の夢路に
その戦友も、それから二年後 ニューギニア
山南のイオムで戦死、靖国に鎮まりましている。



この場 おわり